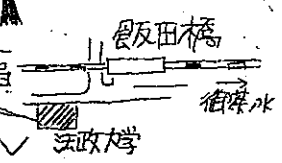
1・17日大全共斗総決起集会

{場所　法政大学学内 52年講堂
{日時　1月17日・PM2:00～



◢理斗委の質的転換と各学科斗争委の任務について
とりわけ建斗委と、そこへ結集する学友の任務について

文責―建斗委・書記局

◢我々はこの記を1・13日大神田地区政治集会の総括を軸として展開していきたい。1・13の集会は集会前には我々理斗委内部を次の様に位置付けられていた。

すなわち日大の今日的情況をいかにして打ち破るかの視点より、合法と非合法の斗争形態をうち出し、「大衆の中へ合法点拠点を構築せよ」の命題を導き出したのである。この命題は極めて抽象的であったし、それへ向けての我々の斗いはどの程度まで進んでいるのかも1・13前には不明であった。しかし我々は1・13の斗いを我々がスローガンとして掲げた「神田地区解放」の現実性が、どの程度であるか、また、それへ向けての大衆の意識が何を求めているのかを、見る事ができた。

1・13の集会は9・30以後の10・21や11・16の斗いを得た質量的高揚をいかに論理化しているのかが問われていると我々建斗委は考えていた。しかし各学部の代表発言は総大状況と小状況のかみ合いを語るまでにいかず、小状況をくり返すのみであった。この事について我々建斗委は、安保沖縄が抜けていたから話にならない、といった様な教条的な総括を出すわけにはいかない。その様な総括や、全共斗は8派の野合であるが故に悪い、の記を駆使しつつ自らの党派性を貫徹せんとする総括にもまた組みしない。

我々はまず、本来斗争の中で語られねばならない大状況を、今日の日大全共斗が何故ああまでイコジになってやらないのか、かつそれを生み出すエネルギーが何故今日まであり続けるのか、さらには何故1・13に800名を越す学友が結集したのはどの様な原動によるのか、を点検せねばならないと考える。

我々はこれを論理化する鍵を次の点におく。すなわち既成左翼社共の展開する街頭斗争の形骸化と羽田斗争→成田→三里塚斗争→全国学園斗争の中で学生が発見し自らが切り開いた力量の増大である。

学生戦線が手にした自らの力量は政治斗争ではない、単なる個別学園斗争であった日大斗争でも、その大衆の掘起しを組織化し、しかも暴力をもって登上させたのである。この力量は学生戦線をていえば、我々理斗委をも建斗委にも波及しているのである。この故に自らの力量に気付いた我々は、たてまえと実際のかけ離れた今日の社共の隊列には加わらないのであり、同時に自らの力量がどれ程のものであるのかを試みる意味においてイコジになって学内斗争においては小状況にしがみつくの↗

建斗委
機関紙
情宣紙
イスクラ
ロシア語で
【火花】
火花はやがて炎とならん！
日大全共斗気付
理斗学部斗争委員会気付
建斗総学斗委員会気付
情宣局書記局
NO.39
1970年
01-16

1・18東大斗争一周年総決起集会

{場所　礫川公園
{日時　1月18日・1:00

スローガン
◢東大本郷へ進撃せよ！

↗である。

この様な総括の視点を持たないならば次の問題点である神田地区共斗及び神田地区解放のスローガンは何等実体化されないし、その展望をも失うであろう。

68年日大斗争を神田地区においてバリストを貫徹し9・4～9・26の斗いを先頭的に斗った理斗委は自らの経験を、活動者会議という内部斗説の徹底の場をもちえたし、同時に大衆という視点をもって自らの学科の情宣、及び組織化を行ってきた。また暴力はいけないのか、等々の治モウな幻想を今のりこえて、暴力を戦術の武器として誇りきれるまでに成長したのである。

しかしこの自らの成長を、自らで意識しきれない、また理論化しきれぬ所に理斗委のそして各学科斗争委の弱さが表われているのである。

この事はイスクラ3号をも述べたと思うが、まさに指導の危機として現出しつつある。

すなわち古田にくし、大学にくしの視点から自然発生的に出現した日大斗争は、今日きわめて危機におかれているのである。すなわち大衆の斗争への自然発生的な性格は指導と極めて簡単な結合をなしとげた。しかしその指導の自然発生的結合は逆に、指導部のコ着化とタイマンを引出した。すなわちその後の大衆の意識高揚と自らの実力斗争は指導をのりこえたのである。この指導が乗り込えられた後その大衆が求めたものは、いうまでもなく、つきることのない自らの展開、しかも自己の内部からの展開であった。

これに答えきれなかった事は、レーニンが述べている様に「斗争はその自然発生性自然成長性を止揚するにまさたその時に自然成長性のまま放置される時、自らの斗争を破壊する」のである。

この点において理斗委は他の学部より一足おくれた形ではあるが、重要な点に立たされているのである。その自然成長性を克服せんとする意識は、神田地区解放のスローガンにもはっきり表われているのだ。それを乗り込えるには大衆への責任をもった理斗委としての我々建斗委が、指導の貫徹の中でいかに自らの成長性（自然的なである）を克服していくかの視点を、危機意識をもって受けとめる事を第一歩としなければならない。

我々は指導の貫徹の中で自らを変革する路を発見した、これは偉大な事である。そしてこの変革された自らは自己の本質との対決をせまられつつあるのだ。建斗委は運動を求める、しかしそれは技術的な面でのみは決してないのだ。革命的という語は大衆と共に叫ばれた時のみ力がある。革命＝大衆の仕事、これをわすれてはならない。自らの変革のための指導を全ての学友は貫徹せよ！

牙牧区 '70

1970
1.14
発行
理闘委
週刊
第3号
1-17

一・三集会を水曜まえ進展させよ！

日大生共闘会議

全学連大神田地区大政治集会は全電通会館に八百余名の結集を持ってかちとられ後六〇〇名以上の隊列で神田地区のデモ行進を貫徹したがしかし我々はその人数のみを誇ろうと言うのではない。理工学部闘争委員会は一・一三集会に向けての活動者会議を行いその討論の中で集会をとらえ返すと言ったサイクルの中に我々の成果があるのだ。

現在国家権力と一体化した古田反動理事会は法学部経済学部における右翼の常駐経済学部三号館における右翼の内部バリケード構築と武装の用意その上シェパードまでかっている と言う現実を我々はきびしくとらえ返さなくてはならないだろう。日大アカシュビッツ体制を学内にあけるあらゆる闘いを非合法にする中で我々の闘いを闇から闇へ葬り去ろうとしている。

がしかし学友諸君そのような中にあって我々は我々の側の合法的拠点を大衆の中に作り出す中で答えるだろう。一・一三集会に経法と言うアウシュビッツ体制の強力な学部においては闘争委員会がその困難な状況の中で大衆の中にあって拠点をふるに使う事によって全電通会館に百名以上の結集をかちとった。がしかし全学友諸君！全電通会館で行われた集会そのものも一過的なものでしかないのだ我々はかならず理工学部内部においてあらゆる集会を貫徹して行ける状況を作り出すであろう。と同時に一・一三集会は小状況の千密な討論とその中から導き出された名学部の方向性が語られたがしかしそこにおいて大状況からの小状況の再度の展開が不十分だった事をこれからの運動実体と討論の中で克服して行かなくてはならないだろう。

集会における華橋青年闘争委員会の特別報告は出入国管理法案の問題から我々に対する鋭い問いかけとして存在していた。我々は出入国管理法案を含めあらゆる問題を我々の生活の中で我々の問題としてとらえ返さなくてはならないのだ。

全学連の学友諸君!!一・一三集会に秋田議長の出席はなかったがしかし我々は秋田議長を決して絶対化してはならないのだ。我々は闘いの中で秋田議長を迎い入れなくてはならないのだ。

全学連の学友諸君!!ありとあらゆる所で自らの拠点を構築せよ。名サールウ名研究会等三ヶ所を結集せよ。

全学連の学友諸君!!一・一三集会の成果を踏まえ一・二七日大総決起集会へ結集せよ!!

日大生共闘会議
総決起集会
PM12:00～
至 法政大学
511番講堂